現代に名刀を生む。

菊池郡合志町

大塚　惟義さん（67歳）
惟忠さん（37歳）
展生さん（14歳）

刀身を白鞘から慎重に抜き取る。目のさめるような冷たい輝きが、あたりの空気を一瞬にして凍らせる。この漲る緊張感こそ、名刀のもつ、一分のスキもない美しさに、ズッシリとした生命感を与えるものではないだろうか。現在では県内で4～5名しかいないといわれる刀鍛治の一人、大塚惟義さんを菊池郡合志町のご自宅に訪ねた。

惟義さん＝刀匠名・肥後菊池住惟義＝は、昭和16年、24歳の時に父親のすすめで八代郡宮原町の刀匠、盛高清博氏に師事し、刀鍛治の修業に入った。そして昭和27年には講和記念刀番鍛治となった。代々、農機具の鍛治をやってきた大塚家8代目にして、新たに刀鍛治の歴史が始まることになったのである。

惟義さんがお住まいの幾久富からほど近い竹迫というところは、もともと刀剣にゆかりの深い地域であった。ここは菊池千本槍がつくられたことでも知られている。

菊池の豪族、中原師員が、夢のお告げで竹林の中から刀を見つけ出したことから、地名を竹迫と改め、竹迫氏一族が誕生したとされる。その後、天正13年の竹迫城落城まで、この地に刀鍛治がいたらしい。

惟義さんの刀鍛治は、菊池川から砂鉄を採取し、それを溶かして鋼をつくるところから始まる。砂鉄からつくり出す刀工は極めて珍しい。そうしてつくった刀は粘りがあって錆びないし、切れ味や地肌の色つやも違うという。ほんとうにいい刀をつくるために惟義さんが苦心を重ねた末の結論である。

そういう中で、刀の素晴らしさを知り、その魅力に取りつかれ、後を継いでいるのが、惟義さんの長男、惟忠さんだ。

惟忠さんは、いま37歳。昭和37年から父親の惟義さんに師事し、すでに多くの名刀を生み出している。

惟義さんは、昭和47年以降、新作名刀展に入選し続けており、惟忠さんも入選8回、努力賞1回、優秀賞1回という輝かしい業績を残している。惟忠さんは、奈良時代まで使われていたという直刀（反のない刀）も見事によみ返らせた。刀は武器としての本質を失ってはならないと語る惟忠さんの刀を見つめる目は、それこそ真剣だ。

伝統工芸を守り続けようとする惟忠さんにとって、心配なのは後継者が先々までいてくれるかどうかだ。惟忠さんには、いま中学三年生の息子さんがいる。その展生さんも、惟忠さんの仕事を誇りに思っている。ただ、惟忠さんの後を継ぐかどうかは、高校に入ってから考えたいと慎重な答えが返ってきた。

今年も、お孫さんである展生さんが見守る中、惟義さん、惟忠さん親子による初打ちが行われた。そして正月の清らかに張りつめた空気の中を威勢のいい響きがつらぬいた。

大塚　惟忠さん

大塚　展生さん

大塚　惟義さん